

(2012年度)

国語

次に示すのは、菅田哲也『世界でいちばん長い写真』(光文社)の一節である。中学三年生の僕は写真部に所属しているが、部長の三好に頭が上がらなかった。夏休み、古道具屋の祖父のもとに三六〇度回転するカメラが届いた。これで卒業記念の写真を撮りたいと思い、祖父や三好、いとこのあつちゃんと一緒にカメラの持ち主である松本さんの家へ行き、協力してもらうことになった。これを読んで、後の問いに答えなさい。

なんだかんだで、こっちに戻ってきたのは夕方の六時過ぎだった。

効率を考えたら、まず三好の家に寄って彼女を降ろして、それからお店に戻って解散、ってすればよかったんだと思う。でも、あつちやんとの話が盛り上がっていたからか、三好は「大丈夫です。お店の方でお願いします」といって譲らなかった。

そのくせお店に着いて、あつちやんとお祖父ちゃんに別れの挨拶をするや否や、

「……内藤くん。そこまで送ってね」

威圧(いあつ) 感たつぷりの小声で命令。

「ああ、うん……じゃあ僕、ちよつとそこまで、いつてくる」

僕に送らせてどうすんの、という疑問はある。だって、もしだよ。夜道で不良にからまれたりして、そうなったとき、僕にどうしろっていうの。僕が三好を助けるの？ まさか。どう考えても無理でしょう。三好が僕を助けるってパターンならアリかもしれないけど。

歩き始めて、最初の曲がり角で振り返ると、まだあつちやんとお祖父ちゃんがこっちを見ていた。

三好が丁寧におじぎをする。

そこを曲がってお店が見えなくなると、なんか、急に二人きり、みたいな雰囲気になった。

「ノロブー。今日は、お疲れ」

「ああ、お疲れさま」

三好は携帯を出して、開いて、またすぐ閉じてポケットにしまった。時間を見たのか、メールの確認か。

白っぽいワゴン車が一台、僕たちを追い越していく。

三好は、その排気音が遠くってから話し始めた。

「……ちよつとき、あたし、ノロブーにいいたいこと、いくつかあるんだけど。いいかな」

そうか。このために三好は、車で送ってもらうのを遠慮したのか。でわざわざ、僕に送ってけっていったのか。やられた。ハメられた。

いくつかいいたいこと？ ①駄目。何もいっちゃ駄目。

「うん……なんでしょう」

何いわれるんだろう。怖いよ。

「あのさ……ノロブー、なんで回転カメラのこと、あたしにずっと黙ってたの」

げ、そこからほじくり返しますか。

「あ、いや……それは」

「一学期にネットで、ママヤのこと一緒に調べたよね。少なくともあの時点で、ノロブーはあの回転カメラの存在を知っていたわけだね。違う？」

ちなみに初号機は、今日の時点では松本さんにお返しして帰ってきました。

「ん……うん。そう」

「なんで隠してたの」

「いや、別に、隠してたわけじゃ……」

「隠してたじゃん。じゃなかったから、あの時点で回転カメラのこと、あたしにいえたはずでしょう」

それは、その、なんといいますか。

「なに。あたしにあのカメラのこと教えたなら、いーないーな、貸して貸してとかいって、横取りされるとでも思った」

ええ。そう思っていました。で、僕より確実に優れた写真を撮ってくるだろう、とも思っていました。

「いや……そういう」

「違うの？ だったら何よ。はっきりいいなさいよ」

僕が、ちよつとの間答えられずにいたら、三好は、ハアッてため息をついて、②ゆるく首を横に振った。

「……そんなこと、あたしがするはずないじゃない。あたし前に、ノロブーにいったよね。もつと自立しなつて。ポジティブになつて。あのカメラに出会つて、ノロブーはノロブーなりに試行錯誤（しこうさくご）して、いろいろやつてみたわけでしょう。失敗してもあきらめないで、なんとか、あのヒマワリ畑までたどり着いたわけでしょう。そういうのさ、他のことならともかく、あたし、写真部の部長なんだよ。なんであたしに、こんなスゴイの撮れたんだよ、見て見てって持つてこないの。自慢しにこないの」

横から見たら、三好は、ちよつと泣き顔っぽくなつてた。

「……情けないよ。毎月五枚は撮ろうねって目標まで決めてんのに、それには応えてくれないで、何やつてんのかと思ったら、ちゃんとカメラやつてんのに、いいの撮れてんのにコソコソ隠してて。でもってあれ、安藤エリカには見せるつもりだったんでしょ」

いや、それは⑦ゴカイです。

「ノロブーのそういうとこさ……あたし、けつこうイラツときてただけど、でも今日、松本さんとこまでいつてみて、ノロブーがああギネス写真見て、うわーつてなつて顔見て、正直……ちよつと、嬉しかったんだよ。あんた、洋輔がいる頃は、毎日ああいう顔してたじゃん。もつと楽しそうだったじゃん。大体さ、洋輔がいなくなつてさびしいの、ノロブーだけじゃないんだよ。みんな、洋輔がいらないならいらないに、いろいろ④クフウしてやつてんだよ。あんた一人だけ、いつまでも迷子みたいに……辛気（しんき）臭い顔してらると、ほんとムカつくんだよ。こつちまで気が⑤滅入るよ」

③僕って、そんなに――。

「三六〇度、ぐるつと笑顔とかいう前に、あんたが笑顔を取り戻しなよ。あんたがまず、洋輔なしでも笑えるようになりなよ」
いつのまにか、三好の家の近くまできていた。

生垣の前で振り返つた三好が、じつと僕の方を見る。でも表情は、外灯が逆光になつて、あんまりよく分からない。

「……とりあえず、新学期。あんたが撮影イベントについて、クラスで提案しな。あたしも協力するから。クラス委員としても、写真部部長としても、全面的にバックアップするから。ノロブーが先頭に立つて、三六〇度パノラマ撮影について、みんなに説明しな」
えつ、そんな。いきなり④コまるよ。

九月になり、二学期が始まつた。

始業式やらなんやらが終わつたあと、僕は三好にえり首をつかまれて、職員室まで連れていかれた。

「谷村先生、ちよつといいですか。内藤くんから、お話ししたいことがあるんですけど」

「ええ、いいけど……どうしたの」

そこで、ようやく首吊り状態から④カイホウされる。ほら、と上履きに蹴りが入る。イッて。分かつてるよ。分かつてるから蹴らないでよ。

「えつと……あの、一学期のときに、卒業記念イベントとして、何をやるのかつて、まだ、決まつてなかつたと思うんですが……」

とりあえず、「世界一長い写真」の撮影を④兼ねた、卒業記念イベントをしたらどうでしょう、というところから始めて、三六〇度パノラマカメラの説明、すでにギネス記録を⑤獲得していること、たとえばこんな感じですよ、とヒマワリ畑の写真を見せ、こういうので何周もやるんです、というところまでいつてみる。

「……どう、でしょうか」

谷村先生は、なんか、笑う途中みたいな顔になつちやつて、そのまま④僕たち二人を見比べた。

「うん、とっても素敵……な、感じでは、あるんだけど、正直、ちよつと……よく分からないっていうか、なんていうか」

ですよね。だつて、松本さんが撮影したみたいなの、人が④輪になつて写真がないんですもんね。一枚くらい④の力りてくればよかったな。

「だからね、谷村先生。こういうことなんですよ」

結局、黙つてらんなくなつた三好が追加で説明して、ようやく谷村先生は分かつた、ような氣になつたみたいだつた。

その翌日のホームルーム。

「……えーつと、一学期に決まらなかつた、卒業記念イベントについてなんですが、内藤くんから提案があるということなので、ちよつ

とみんな、聞いてみてください」

うう。なんか若干、ヤラセっぽい気がしないでも。

「内藤くん、お願いします」

「……はい」

立つと、クラスメイト全員の目が㊤一斉に、僕に向いた。

いや、そんなに、ガン見しないでください。

「……あ、あの……実は」

「ちゃんと、前に出て説明してください」

げー、マジですか。前で説明するなんて、そんなこと三好、ひと言もいってなかったじゃない。

でも、まあ、そういうもんかもしれないね。うん。

仕方なく前までいって、三好がどいた教壇のところに、僕は立った。

「……えっと、これは、その……卒業イベントの、一つとして、提案するんですが、その前に、世界一長い写真、というものについて、説明、します」

声、震えた。ひざもガクガクしたし、手も汗びっしょりになった。みんな、なんでノロブーなんだよ、みたいな目でこっちを見てる。すっごいアウエーに感じた。ここは僕のいるクラスではあるけれど、でも少なくとも㊥この壇上は、僕が立つべき場所ではないと思った。

大体僕だって、好きでこんなところに立ってるわけじゃない。でも、そうなんだよな。今は、僕がやるしかないんだよな。

昨日あっちゃんから電話があって、写真館の宮本さんにはもう協力してくれるように頼んじやったっていうし、代わって出たお祖父ちゃんはお祖父ちゃん、三郎さんのためにも立派な撮影会にしてくれよ、とか、プレッシャーかけるようなことばかりいうし。なんか外堀ばかりガンガン埋められちゃって。

「えっとですね……」

とにかく「世界一長い写真」を語るためには、まずグレート・マミヤシリーズについて、みんなに理解してもらわなければならない。

「あの……それはですね……こう……ちよつとレトロな感じの……カメラで……いや、改造っていうか、まあ、そういうことが、してあって……あります」

僕は身振り手振りを交えて、一所懸命説明したんだけど、でもみんな、チンプンカンプンって顔しかしてくれなかった。中にはあくびしてる人も、隣としゃべってる人もいた。

しょうがないから僕は、いったんみんなに背を向けて、黒板に、チョークで図を描き始めた。三脚を立てて、その上にグレート・マミヤをセットしてある図。ここがモーター、ここが回転軸、って注釈も入れて。大事などころには、赤とか黄色も使って。

「……このスイッチを押すと、この部分がまわると、ぐるぐる回り始めます」

でも、大まかに描き終えて前を向いたら、㊦なんか、ちよつと空気が変わった。

へえーって顔をしているのは、サッカー部の木下。

こう？ って隣の人に動きを確認してるのは、水泳部の唐沢さん。

たぶん、つてうなずいてるのは、美術部の坂本さん。

あれ。なんか、さっきまでのアウエーな感じが、しなくなってる。

「ほら、ノロブー」

あ、そうだったね。サンキュー三好。

「……えっと、それで、僕がちよつとの間、かりてた、三六〇度パノラマカメラで撮った写真があるんで、参考までに、見てみてください」

家から持ってきたヒマワリ畑の写真、六枚を、それぞれ「川の先頭」に渡す。

「……ん、何これ」

「チョー綺麗、すっご」

最初に手渡したのは、陸上部の青木と、アニメ研究会の飯田さん。

「これ何、ノロブーが撮ったん」

そうなんだよ。加藤くん。

「おつ、こっちの夕陽バージョン、チョーよくね」

⑦そういつてもらえると嬉しいよ。島田くん。

「……クミコ、ちよつとさ、これ長いからさ、私が流れてくから、順々に後ろに送っていくようにして見ようよ」
田辺さん。それ、いいアイデアですね。みんなも真似してみてください。

「これって、海岸にいく道の途中の、あのヒマワリ畑？」

そうです、成田さん。ちなみに僕、いま初めてあなたとしゃべった気がします。

「ちよつとよ、俺らんとこも夕陽にしてくれよ。もうねーのかよ」

輪島くん、順番で。順番で流すから待ってて。

⑧でも、あれ？　なんだろう。この感覚――。

そのとき僕は、なんというか、ゾクゾクするような、でも寒気じゃなくて、むしろあったかいというか、妙な感覚を味わっていた。
みんなが僕の撮った、ヒマワリ畑の写真を、取り合うようにして見ている。口々に、すげーとか、綺麗とかいいながら。

「おーい、ノロブー」

急に真ん中辺りで、柴田明が手を挙げた。

「えっ、なに」

「そのよお、回転カメラが、なんで卒業イベントなんだよ」

ああ、そうだったよね。

「……うん、じゃあ、それについて、今から説明します」

僕は再びチョークを握り、黒板に向かった。

やろうとしていることは、大体みんな分かってくれたみたいだった。

ここまでで僕の役目はおしまい。三好に教壇の立ち位置を返す。

「……というわけなんですけど。この、世界一長い写真の撮影会を、私たちの学年の卒業イベントと位置づけて、他のクラスにもアピールしていきたいと思うんですが、どうですか。決をとつてもいいですか」

ちよつと待った、と挙手したのは、もしかして明だった。

「はい、柴田くん」

「それさ、なんで十三回転もやる必要あんの」

うっ、それ、どう説明したらいいんだろ、と僕は思ったけど、三好は全然。うろたえもしなかった。

「ギネス記録更新のためです」

「十三回転したら、ぜってー更新できんのかよ」

「できるそうです。今現在の記録保持者が、さっき説明した、カメラの製作者の松本三郎さんなんで、まあ、いつてみれば、松本さんが松本さんの記録を更新するわけで、そんな、世界中で日々記録が更新されている、というジャンルでもないみたいです。私たちはその、撮影のお手伝いをする代わりに、私たちの卒業写真が、世界記録として登録されると、そういうことです……どうですか」

面白そうじゃん、とあちこちから声があがる。

「じゃあ、決をとります。世界一長い写真の撮影会を、私たちの学年の卒業イベントとして、他のクラスに提案することに賛成の人、手を挙げてください」

たぶん全員が、手を挙げてくれていた。

それもみんな、⑨ちよつと嬉しそうな顔をしながら。

まるで、このクラス自体が、ヒマワリ畑になったような――。

なんていうのは、ちよつと言い過ぎでしょうか。

問1 — ⑦③について、カタカナは漢字に直し、漢字には読み方を記しなさい。

問2 — ①「駄目。何もいっちゃ駄目」について、このように思った理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 急に三好から秘密を打ち明けられそうな雰囲気になったから
イ 自分のことを見下しているような三好の態度に反発したから
ウ 三好がカメラのことをあれこれと聞き出そうとしていたから
エ 自分にとって痛い所を三好にいわれるのが分かっていたから
オ めずらしく素直に話す三好の様子に照れくささを感じたから

問3 — ②「ゆるく首を横に振った」について、このときの三好の気持ちとして最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分には黙ったままで話をすすめてきたことに動揺している
イ 自分のことなのにはっきりと答えられない態度にあきれている
ウ 自分の写真にすっかり自信を失ってしまった様子を同情している
エ 自分が横取りするような人間だと思われていたことに失望している
オ 自分の目標を簡単にあきらめてしまう意志の弱さにがっかりしている

問4 — ③「僕って、そんなに——」について、「そんなに」の後はどのような続きが考えられるか。「洋輔」という語を入れて自分のことばで答えなさい。

問5 — ④「僕たち二人を見比べた」について、このときの二人の気持ちをそれぞれ説明しなさい。

問6 — ⑤「この壇上は、僕が立つべき場所ではないと思った」について、このときの僕の気持ちとして最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 説明だけなら自分の席からで十分だと思った
イ クラスのみんなに注目されるのがいやだった
ウ 三好の代わりは僕にはつとまらないと思った
エ 注目しないみんなの態度に反発を感じていた
オ 三好の強引なやり方には納得がいかなかった

問7 — ⑥「なんか、ちょっと空気が変わった」について、教室の空気がどのように変わったのか、説明しなさい。

問8 — ⑧「でも、あれ？ なんだろう。この感覚——」について、どのようなことを感じたのか、自分のことばで説明しなさい。

問9 — ⑨「ちょっと嬉しそうな顔をしながら」について、その理由として適切ではないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 僕の説明が意外としっかりしていて面白かったから
イ 卒業記念としておもしろそうなアイデアだったから
ウ ギネスブックにチャレンジすることに心が高ぶったから
エ 先生の力を頼らずに自分達だけで決めることができたから
オ めずらしい写真をとることを想像してわくわくしてきたから

問10 — ⑦「そういつてもらえると嬉しいよ」について、あなたのこのような経験を具体的に教えてください。

(2012年度)

国語 解答用紙 その二

受験番号

氏 名

10

[illegible]